

取材日：2016年7月27日



糖尿病



尾道医療圏

医師と医療スタッフ、介護・福祉職までの チーム医療連携の確立をめざして。

Point of View

- ① 地域間、施設間、職種間の垣根を越えて気軽に話し合えるワールドカフェ方式の集まりを企画、実施
- ② 医師と各分野の医療専門職に加えて、介護・福祉の専門職、行政まで巻き込む連携をめざす

医療法人社団啓明会
村上記念病院
副院長

山辺 瑞穂先生

広島県厚生農業協同組合連合会(JA)
尾道総合病院
薬剤部長

堀川 俊二先生

医療法人社団啓明会
村上記念病院
管理栄養士

川上 志帆氏

尾道市立総合医療センター
尾道市立市民病院
糖尿病看護認定看護師

古賀 純子氏

高齢化が進み、糖尿病療養に 多職種連携が必要になった

広島県尾道市は、高齢化率が30%オーバーの、いわば我が国全体の近い将来の姿を体現している地域である。この地で、長く地域医療を担ってきた内科病院のひとつが村上記念病院だ。同院は現在、1,400名以上の

糖尿病患者の診療にたずさわっているという。

副院長で、糖尿病専門医の山辺先生が語る。

「糖尿病患者が高齢化すると、他の疾患を併発するケースが多くなります。たとえば、大血管障害やがん、認知症ですね。

こういった患者さんをひとつの医

療施設、あるいは、ひとりの医師で診るのは困難です」(山辺先生)

そこで、村上記念病院と、尾道市内のほかの基幹病院であるJA尾道総合病院や尾道市立市民病院との間では、相互に患者を紹介し合い、がっちりとした連携を構築している。しかし、それでもまだ不足部分があるそうだ。



左から山辺先生、堀川先生、川上氏、古賀氏

「急性期を脱して在宅で療養を続けるとなれば、医師よりもむしろ、各職種の医療スタッフや、介護・福祉職が中心となって支えていくことになります。

これからは、ますます高齢化が進むわけですから、糖尿病専門医に加えて、彼らの糖尿病に対する知識の底上げや、情報共有が必要不可欠です」(山辺先生)

多職種による連携、気軽に連絡を取り合える横のつながりをつくろうと模索していた山辺先生が出会ったのが、2013年にJA尾道総合病院に赴任してきた薬剤部長の堀川先生だった。CDEJ（日本糖尿病療養指導士）でもある堀川先生は、前任地の広島県北部地域で、10年にわたって多職種による糖尿病連携に取り組んできた経験を持つ。

「この地域でも、高齢者や在宅患者が増えるのに合わせて、糖尿病看護認定看護師やCDEL（地域糖尿病療養指導士）などの資格取得者を増やそうとする動きがあることを山辺先生からうかがい、多職種による情報共有の仕組みの構築の必要性を確信しました。

また、どうせなら、現在の糖尿病患者を診るだけでなく、糖尿病の1次予防のためにも、いずれは行政を巻き込んだ連携をつくりたいとも考えました」(堀川先生)

ワールドカフェ方式で 充実した連携の会を実施

山辺先生と堀川先生は1年ほどかけて、多職種が一堂に会する場をつくる企画を練った。

堅苦しくなく、楽しく話し合える会にしたいと考えて採用したのが、ワールドカフェ方式。

「職種間の枠を取っ払うには参加者の

誰もがしゃべりやすい、少人数でテーブルを囲むワールドカフェ方式が良いと思ったのです」(山辺先生)

「近隣の病院や市内の保険薬局を通して、医療スタッフに参加を呼びかけました」(堀川先生)

そして2016年4月、第1回の「糖尿病診療の医療従事者連携を考える会」(以下、連携を考える会)が開催され、市内の各医療施設や保険薬局から35名ほどが参加し、山辺先生のミニレクチャーに続いてワールドカフェ方式のディスカッションが繰り返された。

「薬剤師が10数名、看護師、栄養士も多数、そして臨床検査技師とケアマネジャーも、1名ずつが来てくれました」(堀川先生)

連携を考える会に参加した医療スタッフには、さまざまな思いがあったようだ。

尾道市立市民病院の古賀氏は、糖尿病看護認定看護師の資格を取得して6年目。

「糖尿病看護の底上げと院内のチーム医療を充実させるには、自分自身のスキルアップも必要だと考え、認定看護師の資格を取得しました。

この6年間、院内活動を中心に行

【資料1】

2016年9月に開催された第2回 「連携を考える会」の告知チラシ



**糖尿病診療の医療・介護・福祉
従事者連携を考える会**

この度、糖尿病診療において、医療種にだけでなく、介護職の若など幅広い方々を対象とした勉強会を企画致しました。下記要領の通り、ミニレクチャーとワールドカフェ形式による情報交換とコミュニケーションを図る目的で企画いたしました。

日時：2016年9月10日(土) 15:00~16:40
場所：尾道国際ホテル 2F 慶安の間 尾道市新浜1-13-6 TEL:0848-25-5931

14:50~15:00 製品紹介 「SGLT2阻害剤カナグル」 田辺三菱製薬 中国支店 学術課

15:00~15:20 ミニレクチャー 演者 尾道市立市民病院 古賀 純子 先生

**『糖尿病患者のあるある
～患者によりそうかかわり～』**

15:20~16:40 ワールドカフェ 進行 JA尾道総合病院 薬剤部長 堀川 俊二 先生

『患者によりそうために必要なこと』

共催：糖尿病診療の医療従事者連携を考える会
田辺三菱製薬株式会社

※広島県糖尿病療養指導士認定研修会申請中[1単位]
※参加費として、500円徴収させていただきます。

お問合せ先：[電話番号]

準備の都合上、お手数ですが8月31日までに、参加希望カードにご記入の上、弊社担当者にお渡しいただくか、上記のお問合せ先までご連絡下さいようお願い申し上げます。ご参加の程、お待ち申し上げます。

キリトリ

ご参加希望カード

糖尿病診療の医療従事者連携を考える会 2016年9月10日(土)

ご所属 _____ 職種 _____ ご芳名 _____

ってきましたが、職種を越えた地域との連携の必要性を感じ、どうすれば実現できるかと思案していた矢先に、この連携を考える会が開催されました」(古賀氏)

村上記念病院の管理栄養士の川上氏は、地域で糖尿病療養についての考え方を広める良い機会になったと話す。

「チーム医療では、情報共有がカギです。特に在宅の患者さん、独居の高齢の患者さんなどの糖尿病療養においては、食事療法について、他の医療スタッフや介護職の方々と話し合う機会を待っていました。

これまでは、ケアカンファレンスなどの限られた時間しかなかったの

で連携を考える会はとても有意義だったと感じています」(川上氏)

違う職種同士が知り合い、 学び合う機会の大切さを痛感

「こういう機会だからこそそのざっくばらんな話し合いで、お互いの考え方がわかったり、長年の疑問が解けるようなこともありました。

今、飲み間違いや錠剤の紛失を防止する目的で薬剤を一包化するケースがありますが、当院では、患者さんがなんの薬かわからないまま服用することや、シックデイのときなど食事内容で内服を調整しないとけ

ない場合もあり、糖尿病薬については一包化しないことが当然だと思っていました。

しかし、この会で保険薬局の薬剤師の方と同じグループになり、『区別して飲み忘れるよりは、きちんと飲むことを大切にしたいので一包化している』とお聞きして、糖尿病薬の一包化に対する思い込みを見直すことができ、また他職種との交流の必要性を実感することができました」(古賀氏)

「私も、薬剤師の方から、『こういう患者さんの場合の食事療法の指導はどうしていますか』と具体的な例を挙げてお尋ねいただいたり、こちら

からも『今さらですけど……』といった質問をしたりして有意義な会でした」(川上氏)

「薬局薬剤師は、なかなか他の専門職と交流する機会がないのですが、在宅訪問をする薬剤師も増えている現在、患者さんから薬に限らず、療養全般について聞かれることも多くなっています。たとえば、インスリンの手技や、低血糖時の緊急対応について等々。そこで、それぞれの専門職の方と話し合うチャンスを求めているので、大勢の薬剤師の皆さんが会に満足してくださったようです」(堀川先生)

「ただ、1回目に関して残念だったの

【資料2】

「連携を考える会」のミニレクチャーとワールドカフェの様子





お話をうかがった皆さん

は、参加者の大半が医療分野の専門職スタッフであり、介護・福祉分野からの出席が少なかった点。これは2回目以降の大きな課題でした」(山辺先生)

今後は各職種にもっともっと積極的に活躍してもらいたい

そして2016年9月には、2回目の連携を考える会を開催した。

「2回目からは、会の名称を『糖尿病診療の医療・介護・福祉従事者連携を考える会』とあらため、介護・福祉分野の皆さんにより強くアピールしました」(堀川先生)

山辺先生も当初から、介護・福祉の専門職スタッフたちの協力なくしては、この地域の糖尿病患者を支えられないと考えている。

「糖尿病医療は薬の選択にしても、食事指導にしても、本当に一人ひとりの患者さんに合わせたオーダーメイドのもの。

同年齢、同程度の症状、同じような体形の患者さんでも、まず臓器の力がどのくらいなのかを診て、さら

にご本人の性格や家族構成、生活のスタイルを知り、療養の環境を考えて治療方針を決めます。

けれども、医師が患者さんと接することができるのは、短い診療時間に限られます。ですから患者さんがきちんと療養を続けられるかどうかは、より身近に接している医療スタッフや、介護・福祉分野の方々にかかっているのです。これからは、もっともっと各職種に、積極的に活躍してもらえる連携を考える会にしていきたいですね。

1回目は、堀川先生にオーガナイズしていただきましたが、今後は、それぞれの職種の中からリーダーシップをとれる人材が現れることを期待しています」(山辺先生)

「施設間、職種間、さらには地域の枠を越えて顔を合わせ、たくさんの話ができる機会は本当に大切だと実感しました。

これからの企画もぜひいろいろ考えていきたいと思います」(川上氏)

「『職種を越えて』という点では、他の地域で、すでに糖尿病療養指導士の会があるようです。

そうした方向性も模索したいと思います」(堀川先生)

ミニレクチャーとワールドカフェというスタイルは4回目までで、その後は形式を変えて連携を考える会を続けていく予定だという。

「今、ひとつ考えているのは、治療の中断を防ぐためには、医師にもスタッフにも、糖尿病の知識や情報だけでなく、コーチングのスキルが必要だということ。2016年8月にまず、佐世保中央病院糖尿病センターの松本一成先生をお招きして、コーチングの講演会を開きました。

いずれ、糖尿病療養にかかわるすべての人たちがスキルを身につけて、患者さんに治療を続けていってもらえる環境をつくっていかなくてはと思っています」(山辺先生)

高齢でも独居でも、あるいは認知症や他の疾患を抱えていても、地域の糖尿病患者が安心して療養できる環境づくりに向けて、尾道の医師と医療スタッフ、介護スタッフたちがしっかりとスクラムを組む日は近いだろう。

医療法人社団啓卯会 村上記念病院

〒722-0014
広島県尾道市新浜1-14-26
TEL : 0848-22-3131

広島県厚生農業協同組合連合会(JA) 尾道総合病院

〒722-8508
広島県尾道市平原1-10-23
TEL : 0848-22-8111

尾道市立総合医療センター 尾道市立市民病院

〒722-8503
広島県尾道市新高山3-1170-177
TEL : 0848-47-1155